

「晩秋の高尾山自然観察行(7)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

春から秋にかけては、自然観察の対象には事欠かない。冬も早春になれば、「春の支度」をしている植物や、気の早い花も見られる。しかし、晩秋から初冬にかけては難しい。目だった対象物はなく、ある意味で自然観察の眼力が、一番試される時期でもある。



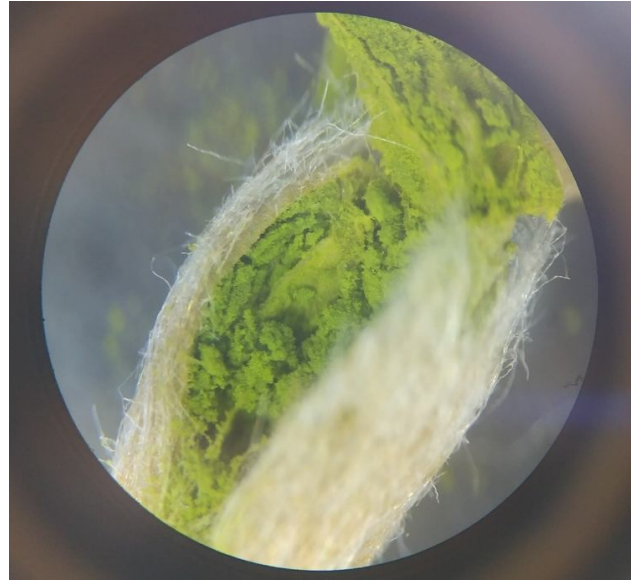
コケ類も光合成を行うので、昼が短く、陽射しも弱い冬は、種子植物同様、厳しい時期であることに変わりはない。写真は、高尾山の山頂近くで見つけたコケの胞子体(さく柄)である。スギゴケの一種と思われるが、コケ類は種の



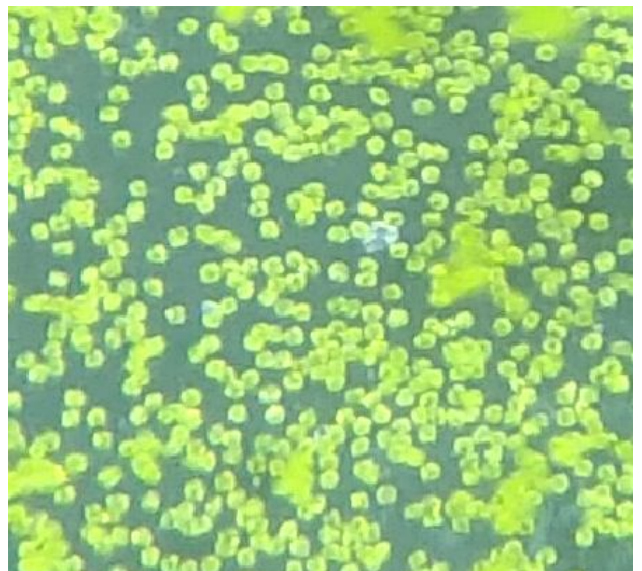
同定が難しく、はっきりした和名はわからなかった。ただ、さく柄の先端の胞子囊の形状からすると、スギゴケ類の本家「スギゴケ(和名)」かも知れない。

見たところ、まだ胞子を飛ばしていないようで、胞子囊の中には胞子が詰まっていると思われた。私は胞子体を数本持ち帰った。

胞子囊の表面は、細毛に覆われている。生物の「形状」や「ふるまい」には、例外なく理由がある。この細毛は「虫に胞子を食べられない為」か「胞子の拡散を助ける為」か、或いは「保温」のどれかだろう。



慎重に縦に割ってみて驚いた。キノコの胞子のように無色か黒っぽい胞子を想像していたのだが、意外にも鮮やかな緑色だった。和菓子の抹茶のこしあんのようで、ぎっしり詰まっている。まだ水分を含んでいるようで、しっとりとした質感がある。どうやらこの胞子囊は、成熟途中の段階だったようだ。胞子が完全に成熟すると、胞子囊の先端の帽子のような部分が開いて、風に飛ばされるにちがいない。



胞子を更に高倍率で観察して、もう一度驚いた。胞子囊胞の内部の組織(たとえば胞子を支える細胞)が緑色なのだと思っていたが、胞子の一粒一粒が緑色なのだ。ペリドット(かんらん石)の結晶の色にそっくりだ。なぜコケの胞子が、こんな色なのだろうか?